

各分科会での議論のまとめ

○ウェルビーイングについて

- ・ ウェルビーイングを目指すことを実現するための教育というメッセージを強く打ち出していただきたい。

自分の幸せを創り上げていくためにキャリア教育を行うことが大切。一人ひとりの多様性に合わせて人生の選択ができて、それがリスペクトされる、どんなキャリアもリスペクトされるような価値観を持てる教育が望ましい。

自分だけが幸せになるのではなく、社会も幸せにしていくために、シチズンシップ教育を行い、共生するための力を育むことも大切。一人ひとりが、いじめのない学校や、多様な人々が安心して共生する社会をつくる担い手となり、また、社会の課題解決に貢献できる主体的な人に育つことができる教育が期待されている。【大学分科会】

- ・ ウェルビーイングについて、日本的な視点で分析せずに、海外視点で分析すると、自己肯定力の弱いという、文化に関わる話なので、定義も非常に難しい。

ただ、ウェルビーイングを置くということは、個人の幸せという視点で、一人一人が持っているような先天的な資質をどう生かしていくのか、どう伸ばすのかということ。幸福な人生を送ることができるような個人の幸せができてこそ、教育の本質。

日本の教育で培ってきたものの強さと、未来に向けての新しい要素をこれから中和させながら行く。このバランスを取っていくやり方こそが日本的なのではないか。【大学分科会】

- ・ 日本型ウェルビーイングの向上、共生社会の実現化に向けた教育は、大きなテーマで分かりにくい。ウェルビーイングは何を目指すのかを定義していただきたい。【大学分科会】

- ・ 教育全体として、特に高等教育を受ける個人がどういう意義があってそうするのかということと、その結果としてつくられた人材が社会にとってどうなるかということは、分けて目標を明らかにしていただきたい。個人の幸せのため、個人がよりよく自分のやりたいことや自己実現を図り、よりよい状態を自分に課していけること、それは個人の幸せのための教育の基本で、特に高等教育は、民主主義が実現できるようないい社会を運営できる人材をつくること。それは、両方とも目的は同じだと思うので、個人として何のためか、社会にとって何がいいかという基本を明らかにしたつくりがいいと思う。【大学分科会】

○共生社会の実現について

- ・ 「共生社会の実現」について、多義的で、抽象的で耳当たりのよい言葉である理想の教育が、今後、学校等でどのように理解・実践されていくかが問題。現場の実践に基づくとともに、現場のモチベーションが高まるよう中教審と学校現場との距離感を意識していくべき。【初中分科会】

- ・ 理想の共生社会をどう守るのかという視点、人為的な危機、自然的な危機、国際社会の自由で開かれた国際社会を守るという点についても、子供たちの方がむしろ鋭敏で、自分たちが大人になった時にこの社会はどうなっていくのか不安と危機感を持って過ごしているのではないか。そこに対して教育は何を教えていくのかという視点が必要。【初中分科会】
- ・ 共生社会の実現を目指した学習を実現というと、困難のない人が困難な人を支えてあげようという議論に向かいかねない。困難を抱えている人がしっかりと生きられるようにしていくことによって共生社会を実現していくべき。【生涯学習分科会】
- ・ 人生 100 年にわたる学びが日常的になってくる中で、人間力を高める、人としての品格、あるいは人としての他者への慈しみとか、そういったことを育むような工夫も今後必要ではないか。【生涯学習分科会】

○学習者主体について

- ・ OECD の Student Agency の概念が、子供を主語にした学び、GIGA スクール、教育 DX などあらゆる教育改革の鍵を握っている。こども基本法やこども家庭庁設置法とあわせて今後、この概念はますます重要になってくる。「学習者を主語にした学びのリデザイン」についての議論を深めてほしい。【初中分科会】

○イノベーションや学修者本位について

- ・ 高等教育機関、特に大学にはイノベーションが求められている。また、最近のトレンドとしては、学修者本位も強調されている。教育力よりも学習力にスポットライトを当てて、様々なことに取り組むべき。【大学分科会】
- ・ 労働人口が減少する中でいかに高付加価値をつくっていける人材を育てるのかということが重要。日本の若者が世界のチームの一員として、ボーダーレスに広がってきている課題を解決して、高付加価値を生み出していくという人材を育てられるような教育に変わっていくところに焦点を置くべき。【大学分科会】
- ・ 今の学生、これから大学に入学する学生はデジタルネイティブであり、違うマインドに切り替わってきている。コロナ禍の時間を観戦動画の視聴に費やしていたという学生もあり、新しい学生の特性に応じた方向性の検討という視点も必要。【大学分科会】

○リカレント教育、学び直しについて

- ・ 次期計画は学び続ける、学び直しがキーワードになっていくと思われる。人生 100 年時代における学びの連続性・継続性、大学と社会との接続、これらが生涯学習体系の移行では重要になってくる。高大接続の次の新しい言葉として、「大社接続」とい

う考え方を入れていただきたい。【大学分科会】

- ・ 高大接続の観点から見ても、また、高卒で就職した人の学び直しの観点から見ても、地域学校協働活動と地域連携プラットフォームが相互に連携することが効果的ではないか。

今後の社会を見据えた場合に、リベラルアーツ教育をはじめとする STEAM 教育の充実が必要。学び直しをした社会人に不利益を被らせないというのはもちろん、そうしたことを評価する制度の構築など、それぞれの立場で連携しながら、学び直しに資する施策を推進していくことが重要。【大学分科会】

- ・ 高等教育のキーワードはユニバーサルアクセス。リカレントとか学び直しは、いつでもどこでも誰でも高等教育にアクセスできるようになること。質保証を伴いつつ、オンラインの充実でユニバーサルアクセスは実現可能である。

入試・入学の国から卒業の国への転換が不可欠。大学に入る際に質保証を求めるのではなく、出るときに質保証するという社会に変えていく、そのためにもユニバーサルアクセスは非常に重要な概念。【大学分科会】

- ・ マルチステージモデルに変わっていく中で、学び続けるためには、仕事の場も協力的でないといけない。つまり教育と仕事との関係が問い直される必要がある。学びのセーフティーネットについても、子供の貧困が問題になっている中で、教育と福祉の関係、その両者をつないでいくことも重要。【大学分科会】

○グローバルについて

- ・ グローバル人材の育成・確保という観点、あるいは我が国の学生が日本の大学に入ってすぐにグローバルを理解するためには、留学生が非常に多いキャンパスが必要。留学生の受入れによってネットワークができ、学生の環境が格段にグローバル化して、自らネットワークを築いてくれるのではないか。

世界各国の優秀な学生が循環するグローバルな流れの中に、日本の大学が参画するという質的な面が特に強調されるべき。日本の大学も世界の人材獲得競争に参加し、欧米のあるいはほかの国の大学と同様に高い授業料を払ってでも留学生が来たいという、魅力ある高等教育、大学を目指すことが重要。【大学分科会】

- ・ 留学生を温かく迎えて日本の社会に溶け込んでもらい、また送り返して日本のサポーターになっていくというシステムも重要。【大学分科会】

○社会教育・生涯学習について

- ・ 学ぶことによって、未来に新しい向上の可能性も感じ、日常生活の潤いを感じたり見いだしたりすることができ、知らなかった人や物、知識、技術にも出会って習得できる。こういったことを豊かにしていくのが生涯学習や社会教育の大切な意義であることを今後啓発・発信すべきではないか。【生涯学習分科会】

- ・ 世界的な様々な課題を日常生活でどう引き受けるかというときに、地域コミュニティがベースになることがまずあると思う。更にそこで、地域コミュニティだけではなく、新しいコミュニティをどう形成するのかという議論もしなければいけないのではないか。【生涯学習分科会】
- ・ 幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、社会教育の連携が重要であり、どのように連携をしていくのかというところに生涯学習の役割があると思う。【生涯学習分科会】

○教育データ利活用やデジタル化について

- ・ 教育データの活用については、「部局横断」と「データセット」の二つの連携が大切になる。教育界では「指導と評価の一体化」が言われ続けているが、例えば、「ウェルビーイングを達成したと見なす状態を評価する」には何らかの指標が必要。【初中分科会】
- ・ 計画においても、指標等の作成や実施に向けて、文科省だけでなく省庁を超えた連携やデータセット連携が不可欠。【初中分科会】
- ・ これまで ICT に関することは、整備率を KPI にしてきた傾向がある。1人1台の GIGA 端末が行き渡った今、期待されるのは、KPI にしにくい指標に挑戦すること。質的な評価を伴う KPI が設定されず、KPI にしやすいという理由で形式的なものが指標になってしまうと、せっかくの整備が形骸化してしまうおそれがある。【初中分科会】

○健康教育について

- ・ 健康教育の重要性について、社会がどのように変化してもその基本には健全な肉体が存在して初めて成り立っている。特にコロナ禍や今後の新興感染症に対する対応、コンテンツのデジタル化に対する身体への影響などを考えると、今後、計画には基本的な考え方として健康教育の重要性を記載すべき。【初中分科会】

○計画の実効性について

- ・ この計画の存在すら知らない教育関係者も少なくない。広く国民全体にメッセージが共有されるといい。【初中分科会】
- ・ 課題に向き合って改善策を考えることが計画には必要。検証の視点として、目的に対して、手だてでは間違っていなかったのだけどリソースが足りなかったのか、それとも手だて自体が間違っていたのかといった検証の視点を持っていただきたい。恐らくリソースが足りなかったという事が教育に関しては多々あるかと思うので、その部分の不都合な真実にもしっかりと向き合っていたいただきたい。その上で、次の計画を立てていただきたい。【初中分科会】

○全般について

- ・ 教育についての羅針盤を明確にしていきたい。初等中等、あるいは高校だとか大学とかというレイヤーごとの考え方から、横断的なテーマごとに歴史的に整理をしていく。その整理が教育振興としての羅針盤になり得るのではないか。【大学分科会】
- ・ 不易という、変わらないものは歴史が築いた日本の教育の強み。教育基本法の前文や1条2条にある普遍的なものをまずベースに置くということ。
流行という、Society5.0社会や、新しい文化の創造、人生100年時代への対応という、流行として変えていかなければいけない部分、これをどう調和するのか。令和というのは「ビューティフルハーモニー」。対抗的な二律背反をどう調和させながら創造の力で新しいアウフヘーベンするのかという思考が重要。【大学分科会】
- ・ 超スマート社会（Society 5.0）について、「予測は困難であるが、そのような社会に新たな活路を開く」ものであるはずなので、誤解を招かないよう、ポジティブな Society 5.0 を前提にということをお願いしたい。また、2040年以降の社会を見据えた検討、議論という記述が必要。【生涯学習分科会】
- ・ 横串や縦串として、複眼的な思考力を持ったような人材、これからの時代に必要な人材を、それぞれの教育段階でどのように育成していったらいいのかという議論を行うべきではないか。【大学分科会】
- ・ 少子高齢化の中でも知識集約的な社会を支えるグローバル人材の育成と確保が必要。また、Society5.0の実現、あるいは個々のウェルビーイングを視野に入れた、パッチワークではない骨太の計画が必要。【大学分科会】
- ・ 産業構造が変わっていくと、私たちが今までこの近代社会をつくる過程で基本的な考え方として持っていた自我とか人格とか自己意識をどうこれから考えたらいいのかも問われてくると思う。これは教育という営みの根幹に関わる問題ではないか。その意味では、システムと私たち個人の在り方のことも考えなければいけないのではないか。その中で、新しい自分たちの生活の在り方や、学びを捉え返して、一人一人の幸せをどう考えるのかといったことも、議論しなければいけないのではないか。【生涯学習分科会】